

世界遺産登録事情 1 <<「沖ノ島」を世界遺産に>>

2006年01月15日

「沖ノ島」を世界遺産に

沖ノ島を世界遺産に登録する活動の一翼として、貴重な文化財をはじめ、その文化財を守りつづけた「海人＝あま」の風土や思い、自然環境など、古代から現代までの沖ノ島を紹介していきます。

沖合60キロにある絶海の孤島「沖ノ島」。この島で発見された古代の祭祀遺跡からは、中東はペルシャで発見されたものとよく似た「瑠璃の碗（るりのわん）」をはじめ、中国、唐の王墓や貴族の墓から出土する「唐三彩（とうさんさい）」、「金銅製龍頭（こんどうせいりゅうとう）」、朝鮮半島の新羅での製作と考えられる「金製指輪」などが出土しています。

唐と古代ローマを結び、絹糸や七宝、香辛料などの珍宝品を商った「絲綢之路（しちゅうのみち）」＝「シルクロード」を通じてもたらされた貴重な品々は、沖ノ島でおしげもなく祀りの奉納品として捧げられ、大和朝廷が威信をかけて航海の無事を祈願し、成就を祝ったところの証でもあります。

その出土品はどれも、「海の正倉院」と称される貴重な文化財で、国宝や重要文化財に指定されている逸品です。



(写真) 絶海の孤島「沖ノ島」

2006年02月15日

二千有余年の約束

世界遺産登録への活動が進んでいる沖ノ島に関する紹介コーナー 昨年10月、市の姉妹都市の大韓民国金海（きめ）市で、伽耶（かや）の文化遺産を世界遺産とするための一大イベント『伽耶世界文化祝典2005・金海』が行われました。

その帰路。博多港を目指すわたしたちの眼前に広がる絶海に、目印のように対馬・壱岐の島々があらわれました。なかでも、絶海にこつ然と姿をあらわす「沖ノ島」は、佐賀・長崎、博多・糸島、宗像への分岐点です。灯台をはじめ国際避難港など、重要な拠点となっています。

この航路は、「魏志倭人伝（*）」の「はじめて一海を渡る。対馬國に至る…。また、一海を渡る壱岐國に至る…」の記述にも合致します。

また、「日本書紀」には、「汝三柱の姫神、道の中に降りまして、天孫を助けまつりて、天孫の為にまつられよ」とあります。天照大神（大和朝廷が祀る神）の子である市杵嶋（いちきしま）姫神・田心（たごり）姫神・湍津（たぎつ）姫神の三姫神を、それぞれ海上の要所に配して、天孫（天皇のこと。ここでは大和朝廷）を助けて、宗像大社＝沖ノ島（沖津宮・おきつみや）・大島（中津宮・なかつみや）・田島（辺津宮・へつみや）に祀られるよう記されています。

この「日本書紀」に記された二千有余年前からの「約束」を守り、大陸からの航路に祀られ、海上の安全を守っている三姫神を大切にしている宗像大社は、現在まで「沖ノ島」を守った立役者であり、「世界遺産登録」を目指すうえでは欠かせない重要な要素です。

*中国の晋国の陳寿という人が編集した「三国志」の魏国の史書「魏志」中、当時の日本（弥生時代後期の邪馬台国＝倭国）の事情が書かれている部分



(写真) 海上に浮かぶ沖ノ島

—沖ノ島と古代航行船—



沖ノ島は、神湊から北西約60km、
対馬厳原（いづはら）から東約75km、
韓国釜山から南東約145kmに位置し
ています

一般の人が島へ行くための定期便などはなく、毎年、開催される宗像大社春の大祭「沖津宮現地大祭＝5月27日」に、公募で選ばれた人が参拝者として上陸することができます。そして、現在も女人禁制のまま。

「海の正倉院」ともいわれる沖ノ島は、古代祭祀が行われていたことを示す遺跡が、あります。出土した遺物などから、4世紀（古墳時代前期）から9世紀末（遣唐使廃止）のころまで、国家的な祭祀がここで行われていたことがうかがわれます。

調査で出土した遺物は全て国宝であり、「海の正倉院」といわれる由縁でもあります。

大和政権が成立し、大王が君臨した近畿地方では、中国大陸や朝鮮半島からたくさんの文化を盛んに受け入れていました。といっても今のように飛行機やインターネットでというわけにはいきません。木造の手漕船や帆船などで風向きや潮の流れを利用して航行していました。

今も昔も、玄界灘沖は船の大変な難所であり、宗像海人（あま）の案内なしでは航行は難しかったと思われま

す。航行中、突然の突風や高波にみまわれ、遭難寸前という海の上で、突然、目の前に沖ノ島が現れ、命拾いをした人々のことを考えると、本当にこの島は、神の島として崇められる存在であったことが想像されます。



(写真) 大王のひつぎ実験航海（船は九州国立博物館に展示）